

『就実大学大学院教育学研究科紀要 2022（第7号）』 抜刷

就実大学大学院教育学研究科 2022年3月10日 発行

子どもから見た「親と担任」の関係性と 不登校状態との関連について

**An association between a child's perception of a relationship of "parent
and classroom teacher" and a status of school refusal**

寺 尾 順 子

子どもから見た「親と担任」の関係性と 不登校状態との関連について

教育学研究科教育学専攻 教育臨床心理学コース 3620001 寺尾順子

I. 問題と目的

不登校となる要因やその背景は複雑であり、それに対応して子どもに対する支援も多種多様に存在する。子どもにとって間接的な人間関係にあたる「親と担任」と子どもの学校場面との間に関連があることが明らかにされている。しかし、不登校や不登校支援との関連や支援を受ける子どもの主観については言及されていない。そこで本研究では、不登校当事者である子どもから見た「親と担任」の関係性が、子ども自身や不登校状態に与える影響や関連について考察することを目的とする。それにより、様々な不登校問題に対する支援を検討することにつながると考える。

II. 方法

先行調査と追加調査で協力を得ることができた調査協力者は5名であり、一対一の対面で半構造化面接を行った。不登校の時期を小学校・中学校と限定し、4名（A～D）を調査協力者とした。不登校期間を初期・中期・転換期と区切り、その3つの時期を軸に作成したインタビューガイドに沿って面接を行った。

III. 結果と考察

初期では親と担任のやり取りを直接見ることはなく、中期では親と担任の関わりを感じる機会が増える一方で、自分のことについて親から担任へ何が伝わっているのかわからない状態であった。しかし、転換期においては、親と担任の関係性が支えになったと感じられたパターンと、感じられなかったパターンの二つが見出された。

その二つのパターンから、親が子どもの状態や意思を担任に伝えることは、子どもにとって安心や心強さにつながっている一方で、子どもが把握しきれない親と担任の間で行われる情報共有には、不安や怖さを感じていることが考えられる。このことから、「親と担任」が情報共有をすることに対する想いに違いがあると言える。

事例Aでは、不登校期間の初期から、親と担任の間で行われるやり取りをAは感じていたことから、学校行事への参加にあたっては親と担任の間で事前に話し合いがあったのだろうと想定している。これまでの、親から担任へ自身の意思や状態が共有され、自身の想いに沿うようなやり取りがされてきた経験はAの中で蓄積され、その結果、事実としてやり取りを把握することがなくても想定するという良い循環が生まれるに至ったと考えられる。同様に親の中にも、Aの想いに沿うように担任と話し合った経験が積み重なり、どの担任とのやり取りにおいても活かされることで良い循環が生まれ、Aから見ても良好な関係性を築くことができたと思われる。このように生まれた良い循環が保たれた状態であれ

ば、転換期を迎えたとき、転換期における親と担任のつながりを子どもが支えにすることができると考えられる。

ただし、事例Bのように初期・中期において親と担任の連携を感じられなかったり、事例Cのようにやり取りに対して不安や怖さを抱いていたりすると良い循環は生まれにくくなる。そのような場合、やり取りの内容を把握できる機会や知ることができない状況が緩和される機会として、家庭訪問が挙げられる。Bは親と担任の話し合いを含め、その場も共有することができたため心強さを感じ、Dは親と担任の会話を聞くことができ、わからないという思いから生じる怖さが和らいでいる。これらのことから、子どもがやり取りの内容を見聞きすることは「親と担任」の関係性を脅威に感じることを防ぐ可能性があるかと推測される。

一方で、親と担任のやり取りを知ることは登校へのプレッシャーとなる恐れもあり、「親と担任」に対する不安や不信感が助長されれば、支えになると感じられなくなるだろう。しかし、事例Cのように、親と担任の関係に入ることはできなくても、親とのつながりをもつことが可能であれば、子どもから親に伝えられた意思を親と担任の間で大切に扱うことができる。そして、子どもが転換期を迎えた際、親と担任が子どもの意思に沿った対応を取ることで、子どもにとっては少なくとも疎かにされた印象は受けないと思われる。

事例Dのように、親に対しても意思表示がされないとなると、「親と担任」のやり取りだけでは限界があると言える。そこで、不登校支援の資源となり得る人物の範囲を広げると、子どもにとって支えとなる人物は、例えばきょうだいや祖父母、地域住民も含まれるだろう。親や担任のように日常的に言葉がけをしやすい人物だけではなく、Dには心地の良い距離感を保つことができる人物との関わりがあり、その人物との関係性はDの拠り所となっていたと考えられる。このことから、学校から離れた雰囲気の中、学校の存在を比較的感じさせない人物と一緒に過ごすことは大切な支援の一つになるのかもしれない。

以上のことから、子ども自身や不登校状態には、直接的な人間関係だけではなく、間接的な人間関係も影響を与えると考えられる。特に、転換期において、子どもが「親と担任」のやり取りを見たり感じたりすることからも、「親と担任」の関係性が支えになると感じている場合には、次なる支援へとつなげていくことが有意義であるだろう。その反面、そのやり取りが子どもにとって負担に感じられる場合もあるため、親と担任のつながりは保ちつつも、子ども自身から関わりをもつことができる人物とのやり取りを子どもが支えにする中で、気持ちの変化につながっていくと思われる。このように、直接的であろうと間接的であろうと、安心・信頼できる人物との関係性を大切にすることは支援の足掛かりになるのではないかと推察される。

指導教員：井芹聖文